

ことば遊びから狂言「蝸牛」へ

——語ることから広がる保育の総合的な表現活動——

From Word Play to Kyogen “Kagyuu” (a Comic Drama “The Snail”)

Comprehensive Expression Activities in Childcare Spreading from Talking

井本 トシミ

Toshimi IMOTO

(ひかり保育園)

岡田 桂子

Keiko OKADA

(ひかり保育園)

嶋田 由美

Yumi SHIMADA

(和歌山大学教育学部)

2010年11月2日受理

1. はじめに

2008(平成20)年3月に改訂された「小学校学習指導要領」の「国語」では、新しく「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が加えられた。特に、第5・6学年では、指導する事項の「ア 伝統的な言語文化に関する事項」では、「親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること。」と明記されている。さらに、「指導計画の作成と内容の取扱い」の中では、「伝統的な言語文化に関する指導については、各学年で行い、古典に親しめるよう配慮すること。」とも記されている。このように、改訂に伴って「伝統的な言語文化」の指導が焦点化されたことは、現場の教師たちにその内容と指導方法に関して様々な不安感を抱かせているように見受けられる。一方、これまで「伝統的な言語文化」に関する経験も余りない子どもにとっても、いきなり学習教材としてこの種のもものが提示されれば、日頃の言語活動との違いから来る違和感や距離感をも感じさせるものになってしまう可能性も否定できない。

しかしながら、学習という形態をとらない就学前の子どもにこのような伝統的な言語文化を、遊びの一環として提示することによって、子どもはことば遊びを楽しみつつ、自然な形で「伝統的な言語文化」に身体を浸すことができることをこれまでの保育実践から感じている。

筆者たちの園¹ではこれまで数年にわたり、日々、昔話の絵本の読み聞かせや語りのスタイルを意識したお話を続ける中で、地域に伝わる民話にも着目し、3～5歳児を対象に園児の語りによる文化伝承の可能性を見出した。そして、これらの実践については日本保育学会第60回、61回大会において報告を行って来た。本稿ではこれらの語りを重視した保育活動の基盤の上に行った平成20～21年度の2年間における5歳児、各年度20名、及び26名を対象にした実践を報告し、その保育活動としての意義を検証する。

この2年間の取り組みの中では、園児自ら語りを繰り返すうち、難しい文体を言い回しやすいうようにこと

ばの繋がりに抑揚をつけて、声による響きを楽しむ姿が見られた。さらに、狂言「蝸牛」にも取り組み、語りを楽しむのみならず身体、造形それぞれの表現活動をも伴った総合的な表現活動にまで展開させることができた。

2. ことば遊びに対する園児の反応

これまで本園では、「でんでらりゅうば」「いもにんじん」などの唱え遊びに類するわらべうたで遊んだり、数多くの日本の昔話の語り聞かせを行ってきた。また地域の民話を集めた中野千代著『民話・伝説集 やっつけられたたかたか坊主 ～藤井寺のむかしばなし～』の中から園付近の話を選び、実際に民話が伝わる場所を訪れながら園児自身が地域の民話を覚えて語る、さらに発展させて自分達でその絵本を製作するなど、ことばへの関心を深めさせる保育活動も行ってきた²。

これらが動機付けとなって平成20年度には、園児はことば遊びを大いに楽しみ、それらに関する絵本にも強く惹きつけられていく様子が見られた。その中でも園児のことばの発達や遊びの展開に大きな作用が見られたものとして以下の2作品が挙げられる。

『これはのみのびこ』(谷川俊太郎・作 和田誠・絵サンリード)

この作品は、

これはのみのびこ

これはのみのびこのすんでいるねこのごえもん

これはのみのびこのすんでいるねこのごえもんのし

っぽふんずけたあきらくん

というように前文に繋げてどんどんことばが増えていき、全部で15文になるものである。

あるとき、家庭においてもこの絵本を気に入っていた女兒が、始まり部分を覚えて面白そうに言い出したが、それを聞いていた他の園児が次々に競い合うように覚え始めた。繋がることばの面白さに夢中になり、ことばを丸呑みしていたかのように、全てを一気に声に出して喜ぶ姿が見られた。遊びの展開として、「のみのびこ」で親指と人差し指を小さく摘む動作をしたり、

「しっぽふんずけた」で片足を踏みつけて床をならすなど、文に合わせた身体表現を提案すると、園児同士でも考えたり、1文ずつ友だちと交代して言い合うなど、ことばに合ったイメージの拡がりも感じて楽しんでいる様子が見られた。

『春はあけぼの』（清少納言・文 たんじあきこ・絵 齋藤孝・編集 ほるぷ出版）

この絵本を使って保育者が詞章を唱歌のように聞かせてみると、ずっと園児の中にことばが入ったかのように、保育者と同様の語り口調が移っていった。歌うように連なる切れの良いことばが、園児の心に響き、心地良さを誘ったと思われる。

絵本の挿絵から春夏秋冬のそれぞれの情景を全体的には捉えることができたが、秋の「まいて かりなどの つらねたるが いとちひさくみえるは いとをかし」という箇所では一人の園児が手をかいぐりさせながら、猟師の鉄砲撃ちを真似た。そこで文章の意味を丁寧に説明することにしたが、その後も同園児は同じ身振りを友だちにやって見せ、互いに笑い合っていた。「まいて」をましてと巻いて、「かりなどの」を雁と狩りの意味の違いを理解しつつ、異なることばの意味の振りをつけて楽しむ遊びが見られた。

『これはのみのびこ』や『春はあけぼの』の唱えを楽しむ園児の活動をさらに発展させ、同年度のひなまつり会では、これらを、若干の動きを伴って5歳児全員で唱えるという発表の場を設定した。

上記のような平成20年度の活動を受けて21年度には、『ことばあそびうた』（谷川俊太郎・詩 瀬川康男・絵 福音館書店）から幾つかの作品を取り上げ、園児自身のことばの発想を繋いだことば遊びを試みた。園児は本文の一部を入れ替えて違うものを作ったり、関連させたことばを付け足したりし、もじりを楽しむようになった。以下は保育者の誘いかけにより、『ことばあそびうた』所載の原文に繋げて作った園児のうたである。

①「かっぱ」に基づいて園児が作ったうた

原文の、

かっぱかっぱらった

かっぱらっぱかっぱらった

とってちった

かっぱなっぱかった

かっぱなっぱいっぱかった

かってきってくった

に続けて、園児がことばを出し合い作ったものが、

かっぱらっぱはっぱきった

かっぱさったほっとした

かっぱさっきがきかった

というものである。

表記上では2文目の「した」の箇所を除き、すべてに促音を入れ、上手に韻を踏みながら本文に合うように繋げている。そして、全体を通して仮に音楽上の音

符で書くとすると3連符で書かれるようなリズムに対して、「した」の箇所では2文字を2連符で表記できるようなリズムで唱えた。この「した」の箇所のリズムには、少し怖さを感じさせる存在であった河童が去り、ほっと落ち着くことができた気持ちまでもが込められているように思われる。

さらに、本来ならば「ほっとした」で終るような唱えに、「かっぱさっきがきかった」と思い出したかのようにもう一文が繋げられる部分も、子どもの発想として非常に面白く感じられる。

②「き」に基づいて園児が作ったうた

原文の、

なんのきこのき このきはひのき

りんきにせんき きでやむあにき

なんのきそのき そのきはみずき

たんきにそんき あしたはてんき

なんのきあき あきはたぬき

ばけそこなって あおいきといき

に続けて園児が作ったものは、

なんのきそのき そのきはきつつき

つきはたぬき うさぎのあにき

というものである。

濁音も使いながら何とか繋がるようにという意識に加え、月と狸と兎の関係は偶然とは思えない面白さがあり、語呂合わせも上手くて驚かされた。

ここでは、他の行と音数律が異なる「つきはたぬき」の箇所で、「なんのき」「そのきは」の4拍に同調させるように、3拍の「つきは」の直前に1拍分の休みを入れて、合計で4拍に合わせている。この休みはその直前の「そのきはきつつき」の他よりひとつ多い音数律の箇所を休まずに唱えた後で、ごく自然に入れられており、唱えた際の前後の流れも非常にスムーズなものとなっている。

このように園児は自分たちが作った唱えの歌詞をも、くり返し唱えることを楽しんだが、これは既製の唱えの歌詞を何度も唱えるうちに、そのことばの響きや抑揚、そしてリズムを身体に深く取り込んでいたからだと言えよう。

3. 狂言「蝸牛」へ

様々な形態のことば遊びへの関心が強まる中で、平成21年の9月頃から狂言絵本『かたつむり』（内田麟太郎・作 かつらこ・絵 ポプラ社）を5歳児に読み聞かせてみた。園児が慣れ親しんでいるわらべうたの中に、譜例1)のような「でんでんむし」という遊びがある。

これは平安時代末期の『梁塵秘抄』の「舞へ舞へ、蝸牛、舞はぬものならば、馬の子や牛の子に蹴させてん、踏みわらせてん、真に美しく舞うならば、華の園まで遊ばせん。」³⁾に由来するような、みんなで手を繋いで「でんでんむしでむし でなかまぶちわろう」と何度



譜面1 「でんでんむし」

も唱えながら渦巻きになり、何重かになった後にそれをほどいていく遊びである。園児は、年齢を問わず、渦巻きになったものがまた一重の輪に戻ることを楽しみながら遊んでいる。狂言絵本『かたつむり』にはこのわらべうたの歌詞がお雛子として入っているため、遊びの展開としてふさわしいのではないかと考え、読み聞かせの一冊に選んだ。

この絵本『かたつむり』の筋は以下のようなものである。

かたつむりを知らない主人公「太郎冠者」は、「主」から、かたつむりを捕ってくるように命じられ、姿かたちを教えてもらい藪へ探しに出かけたところ、ちょうどそこで寝ていた「山伏」のことを、かたつむりだと思い込んでしまう。声をかけられた「山伏」は間違えられたことを面白がり、太郎冠者をからかうつもりでかたつむりの振りをしながら太郎冠者に「でんでんむしむし…」とお雛子を唱えさせつつ、屋敷までついて行く。そこで待ちかねていた「主」も巻き込まれて一緒に踊ってしまう。

一番最初の読み聞かせて園児からは、かたつむりを知らない主人公「太郎冠者」の思い違いから生じる、「主」や「山伏」とのことばの掛け合いの面白さに、笑いが起こった。このことから狂言絵本『かたつむり』が、ことばの表現活動を発展させるにあたっての良い題材になると確信された。

そこで、保育者自身が狂言そのものへの理解を深める必要性を感じ、大槻能楽堂へ出向き、狂言「蝸牛」の本物の舞台を見たり、『狂言への招待』（京都大蔵流茂山千五郎家）というDVDをくり返し鑑賞することによって狂言への知識を深めた。

その後、実際の狂言台本『狂言集下』（日本古典文学大系43 1961年 岩波書店）に合わせながら、絵本のページに沿って、園児に読み聞かせを試みたところ、通常以上の集中力がみられ、内容に違和感を抱くことなく、狂言独特の、園児にとっては聞き慣れないことばそのものを楽しんでいる様子が窺えた。

次に絵本をはずし、台本を使った語り聞かせのスタイルにすると、話の中に出てくる「エイエイヤットナ」という掛声や、「ハア、雨も風も吹かぬに、出ぎ かま打ち割ろう、出ぎ かま打ち割ろう／でんでんむしむし でんでんむしむし」と続くお雛子の箇所を一緒に唱え始めた。そして2、3度聞いたのちには覚えた部分を保育者の語りに重ねながら一緒に語り出す園児も現

れた。これに対して他の園児が驚き、友だちが語る狂言ことばを笑いながらも聞いており、次に語り聞かせたときには声に出す人数が増え、園児全体の中にも狂言ことばが受け入れられていく様子が見て取れた。

そこで「狂言ごっこ」と称して、演じてみたい登場人物に分かれて掛け合いをしてみることにした。最初の担当分けでは、クラスの約半数の園児が「主」を希望し、続いて「太郎冠者」、「山伏」となった。この狂言にとって重要人物である「山伏」にはなく、「主」に半数の園児の希望が集まったことに、まだ役の軽重には思いが至らず、「主」が一番偉いと捉えているような子どもならではの選択の理由があったと思われる。

クラスで掛け合いを始めると、すでに覚えて声に出せる箇所の多さに驚かされたが、全員で語るとまだばらつきが見られた。園児自身も合っているのか違っているのか判断がつかない様子であったため、2～3人ずつのグループで交代しながら掛け合うことにした。進めていくうち、「太郎冠者」の登場場面が多く、少人数では難しかったため、「主」役から交代者を募ったところ、「太郎冠者」を面白く感じるようになっていた園児が多くおり、中でも女兒たちが競い合うように「太郎冠者」役への変更を希望した。その結果、「太郎冠者」役がクラスの半数を占めることになった。

「狂言ごっこ」への園児の関心をより深めるため、実際に演じられている狂言「蝸牛」のDVDを使って音声のみを聞かせてみると、「えっ、これって一緒？」と驚き、皆がざわついた。自分たちが掛け合っていることばと同じことばであるという認識はあるものの、声の高低や発声の方法、抑揚などにより、違うものに聞こえたようである。しかし、注意深く聞いてみると聞き取れる箇所があることに気が付き始め、聞きたいと思う気持ちが強く感じられた。その際には以下のような園児同士の会話が聞かれた。

M児：あ、ここ私たちのところ。

他児：ここはどこのところ？ここは？

K児：もう静かにして！

M児：ここから太郎冠者と山伏やで。

K児：しっ、静かにしてえや。

DVDの音声の所々で、保育者が声を出して重ねると、園児の表情がゆるみ、聞き易くなったことが見てとれた。

その後、お雛子の部分で狂言の所作を真似て園児に動作をつけることを勧めてみると、もどかしそうにしながらも、ことば、手、足のそれぞれ違うリズムを、懸命に合わせようとする姿が見られた。また園児から「友だちが(狂言を)言うときに一緒に言うのが面白い。」という声が聞かれるようになったことを受け、数人ずつの交代制から同役の園児全員で一緒に掛け合うことにした。「太郎冠者」役は発話数の多さを考慮し、2グループに分けた。園児は特に以下の掛け合い箇所

を面白がった。

①主：ヤイヤイ太郎冠者、あるかやい。

太郎冠者：ハアー。

主：いたか。

太郎冠者：お前におります。

主：念無のう早かった。

②主：エーイ。

太郎冠者：ハアー。⁴

上記②の「エーイ」「ハアー」は狂言独特の主人の命じ方と、家来の受け答え方である。

このようにしばらくクラスでの掛け合いを楽しんでいたが、10月中旬に入り、ほぼ覚えていた掛け合いが、急に崩れだす傾向が見られた。これは、「蝸牛」全てを、たやすくことば遊びのごとく覚えたことで、話の中に幾度か出てくる「イヤまことに」「これはいかなこと」などのことばがきっかけとなり、前の文に戻ってしまったり後に飛んでしまうことが生じたためであった。それまで自由に掛け合いを楽しんでいた園児にも、しばしば戸惑いの表情が見られるようになっていた。

狂言遊びを続けていくにあたり、話の筋をしっかりと意識づけていくことが必要と考えられたため、再度、絵本を使い、物語の筋の確認を数回行った。するとその後は筋の飛び散りがなくなり、ことばや文節に意識が入るようになっていった。

4. 狂言ことばが日常の中へ

このように「狂言ごっこ」を楽しむにつれて、室内や戸外で自由に遊んでいる最中にも、友だち同士で突然、「狂言ごっこ」が始まり、力強い声と所作でお囃子をぴったり合わせて喜ぶようになった。また、印象的な狂言ことばを、日常の何気ない友だちとのやり取りの中で使い始める様子も見られた。それら、園児が自在に遊びの中に取り入れた狂言ことばの代表的なものは以下のようなものである。

①ことば尻に「ござるか」をつけて尋ねられると「なかなか」と答える。

②その通りであるという意味で「うたがいない」と返事をする。

③並ぶ順番や場所決めの際に「ここもとがよかろう」と言えば「そこもとがよかろう」と答える。

園児はこれらを上手に、相手に合わせながら、その場に合ったものを瞬時に選んで遊んでおり、特別なものであった狂言をすぐに遊びの中に取り入れ、自分たちのものにしてしまう子どもの柔軟な力を感じさせられた。

また年長児の「蝸牛」への取り組みを長く耳にしていた4歳児からも、お囃子を真似て友だちと一緒に言い合ってみたり、鉄棒遊びの際、並びながら自分の場所の確保に「ここぞござる。」「そこぞござる。」などと言って遊ぶ声が聞かれるようになった。中でも4歳児

のM児は年長児の「蝸牛」が始まると同時に、その声を聞きつけて毎回、年長児の部屋を覗きにきた。そのうち狂言遊びの気配まで感じるようになり、始まる前には、M児がいつも見ている所定場所に姿を現し周囲を驚かせた。日常的な生活環境の中で、自然と目にしたり、聞こえたりすることが及ぼす影響の大きさを実感した。

5. 小道具作りによる狂言あそびの深まり

山伏が、騙された振りをしてかたつむりになる場面で、小道具があればより楽しめるかと思い、園児に作りたいものを尋ね、アイデアを募ったところ、口々に難しい、と言いつつも気持ちが高ぶる様子で考え始めた。

山伏の結袈裟：

山伏は、結袈裟、ほら貝、頭襟を作ろうということになるが、作り方の意見が出にくかったので、まず担任が結袈裟について、運動会で使用した小さいポンポンをあやとりの紐に付けて作ってみてはどうかと提案を試みた。園児は「それいいな!」と共感し、「どうやってつけるの?」と方法を確認する声が上がった。

山伏のほら貝：

次にほら貝の製作を問かけると、園児はしばらく考え込んだ後に、「紙やな。」「あの中の何かで作れるじゃない?」などと言いながら、廃材を集めている箱の中からカップや空箱を引き出し始めた。しかしこれだという物は見つけれずいた。

すると、K児が、七夕製作で経験した貝殻つなぎを思い出し、その方法でほら貝を製作することを提案し、他児もそれに同意した。そして、廃材の中にあつたダンボール片で形にしてみると、ほら貝らしくなり喜んだ。担任の、「色はこのままでいいのかな?」という問いかけに対しては、「色紙貼ろう。」「色ぬれば?」という意見が次々と出された。

担任が廃材の中にあつた淡い色の和紙を提案すると、それを使用することに決まり、山伏役の園児は、和紙をちぎりながらダンボール片の切り口にもきれいに被せて、色合いの良いほら貝に仕上げた。写真1)



写真1 「ほら貝」

山伏の頭襟：

山伏の頭襟作りでは、A児の「箱とかカップを使おう」という発案に、カップを探したが、恰好よく揃えるための全く同じ形のカップが揃わなかった。すると、

M児が、「箱、R児が作れるで。」と、友だちが折り紙で箱を作れることを思い出し、R児に製作を促した。すると、R児は、「あっ、できる！」と嬉しそうに、折り紙でよく作る升折りの箱を作り、頭にのせてみた。その作品は園児の頭には小さすぎて友だちの笑いを誘い、もう少し大きい用紙が必要という意見が出された。そこで、担任が画用紙を切ることを提案し、大ききの違うものを数枚用意してそれぞれ試し折りをした後に、ちょうど良いと思うサイズのを園児自身が選んだ。写真2)



写真2 「小道具を付けた山伏役の園児」

主の髭：

次に「主」に対する皆の共通イメージであった白い髭を作ることになる。

S児からは「画用紙を髭の形にして、白い紙をちぎって貼ろう。」という意見が出されるが、これは、ほら貝製作の際に和紙を貼り付けた影響を受けていると思われる。

担任の「丈夫な方がいいから、厚紙で型を作ってみようか？」ということば掛けに応じ、厚紙で、顎髭にしたいという園児の希望を取り入れて長いものを作った。

装着が難しかったので、担任の提案で口の部分を切り抜いて鼻の下から続く大きな髭にし、フェルトの裏打ちとゴムバンドを付けることで落ち着いた。一人ずつの口のサイズに合わせて型取りをしたことで自分の一部分という思いが感じられたようである。

太郎冠者の網とたすき掛け：

太郎冠者役の園児は、かたつむりを捕まえる網を作りたいと強く要望し、製作方法を皆で考えた。その際には、以下のような会話が聞かれた。

G児：虫取りの網、家にあるで。

N児が廃材のリングネットを指しながら、

N児：これがもっとあればなあ。

R児：(絵本の)切り紙遊びに載ってたよ。

R児から上記のようなヒントが出されたので早速、切り紙製作の絵本を開き、網目状に切る方法を真似た結果、大変きれいな編み目を作ることができた。

さらに、M児からは「画用紙で作った方がいいで。」、S児からは「それに割り箸つけよう。」という提案もされた。

そこで、立体的に扱いやすいように、担任が画用紙をあらかじめ手揉みをして柔らかくしておくことにした。画用紙だと折った時に厚くなってしまい、切り込むことが難しかったが、この作業にも丁寧にゆっくりと取り組み、それぞれ違う編み目模様の出来栄えを喜んだ。最後に担任が段ボールで網の枠を作り、園児と一緒に仕上げた。写真3)

また、たすき掛けは布を三つ編みにして作った室内用の縄跳びを使うことにした。写真4)



写真3 「網」



写真4 「小道具を付けた太郎冠者役の園児」

このようにじっくり話し合いながら小道具を製作したことにより、園児の内面では、狂言の内容が一層、具体化、明確化されたようであった。

またこれら小道具の使用は、ことばと上手く相乗し、園児の声に張りが出てよく響き、より面白さを味わうことへと繋がった。

2月末には大勢の保護者に向けて狂言「蝸牛」を発

表する機会を得たが、鑑賞した保護者からは「どうしてこんなに長いものが覚えられるのか?」と驚かれ、「子どもって、興味があれば難しいものでも簡単なんですね。」というような、納得と感心の評価を得た。写真5、6)



写真5 「小道具を付けた狂言遊び」



写真6 「保護者に向けての発表」

6. 映像による実際の狂言を見て

実践の最終段階では、実際に演じられている狂言「蝸牛」のDVDによる映像を見せ、園児の反応をみたところ、狂言師の大きな動作をつけた表現に、「えっ、こんなふう動くの?」と驚き、「なんか、声が高い。」「うたを長く伸ばしてる。」と、感じたことを述べ合いながら、演技に魅せられている様子が窺われた。

園児の狂言遊びの際にも、各自が思い描いたように自由に動いてみることを勧めてみると、

- ①主の命令に、心得ましたと返事をする際に、きちんと手を揃えるようにしたい。
 - ②太朗冠者が山伏を見つけた所で、藪をかき分けてぶつかり、あっと気づいた後に、わぁーっと驚いたらどうか。
 - ③山伏をかたつむりだと思ったときに、喜んで、かたつむりの真似をしよう。
- など、次々に園児の思いがこもった提案が引き出され、

狂言遊びに取り入れることができた。

7. まとめ

園児は日常的に新しいことばを吸収していくが、ことばの意味が分からなくても、響きやニュアンスが気に入れば、ためらいなく受け入れ、同時にそのことばを使って他児との交流を試み、遊びへと繋げることができる。今回、発展させた狂言遊びで、園児から「みんなで一緒に唱えることが楽しい。」との声が多く聞かれた。狂言の持つリズムや抑揚が園児にとって他の園児と共有できる、ことば遊びとして受け止められたのであろう。また、話の筋を十分に理解した上で、狂言の持つ質の高い面白さ、音楽・ストーリー・小道具・動きの総合芸術としての側面を、素直に感じて表現し、心地よい笑いを感じることができた。

一見、子どもにとっては遠い世界にあると思われるような伝統芸能の狂言ではあるが、この保育実践を通して、狂言は決して遠い世界のものではなく、提示の仕方によっては、このように就学前の子どもたちの総合的な表現活動の可能性を拡大させるものとなり得ることを確信した。

中でもとりわけ「蝸牛」は、狂言独特のことばや掛け合いの面白さに加えて、かたつむりという子どもにとって極めて身近な生き物を題材としていること、また「でんでんむしむし でんでんむしむし」という囃子詞に合わせて手拍子、足拍子を伴った身体表現活動ができることなどで、就学前児と行う活動にとって恰好の題材であると考えられる。

今後は、「茸」など他の狂言の演目の中から、保育活動に活かせるものを選び、遊びの延長上にこれらを位置づけて、園児の総合的な表現活動を支援していく保育活動のあり方を探ることを課題とする。同時に、就学前に行ったこれらの活動を基盤にして、小学校での言語学習を自然に受け入れられる、子どもの言語に対する柔軟な力をさらに伸ばせる保育活動を目指していきたい。

注

- 1 大阪府下の民間保育園。筆頭執筆者の井本は主任保育士、岡田は園長。嶋田は同園にて、10年以上にわたって毎月定期的に園児へ音楽やことばの表現指導を行っている。
- 2 井本トシミ・嶋田由美「保育園児による地域の民話の伝承—地域の保育園としての文化伝承の可能性とその意義を探る—」『和歌山大学教育学部紀要—教育科学—』第59集 2009年
- 3 榎克朗校注『梁塵秘抄』(新潮日本古典集成第31回)1979年 新潮社 p.170
- 4 『狂言集下』(日本古典文学大系43) 1961年 岩波書店 p.181